



「狐物語の世界」

著者 原野・鈴木・福本  
出版社 東京書籍

価格 一二三六円

(本体価格 一二〇〇円)

この本を一読して、私は一昨年から昨年にかけて、神沢教授のセミナーで行われたフランス中世作品の写本の解説のことを思い出さずにはいられなかった。そこでは次の順序で授業が展開した。写本の特殊書体の文字をまず現代の文字におこす。その際問題になるのは、写本には句読点がないこと、写字生の犯したであろう間違え、省略記号などである。句読点がないために、我々が付けなければならぬ訳だが、そこで問題になるのは、中世のフランス語は、現代フランス語に比べてはるかに統辞規則が緩やかだったことである。兎に角、レポーターが自らの判断で特定の節を文字におこしてみる。そこで解釈にはいるさつそく今述べたばかりの句読点付けの幾つかの可能性が問題となり、我々は時に解釈の

曖昧さに悩まされる。しかしこれは一つの写本内の問題にすぎない。ある作品には複数の写本が現存している場合だってある。その場合にはある箇所について、幾つかの写本を見比べる必要が生じてくる。我々は此処までは立ち入らなかつたが、こう言つたことを、ここに紹介する本の作者達は長年の間やつてこられたのである。具体的には、フランス中世に存在した、枝篇と呼ばれる長短様々な話からなる『狐物語』の未校訂写本による新校訂本を作られたのである。この研究者達の苦労が察して余り有るのは、西洋中世の作品に取り組まれたということである。基本的な素養からして、西洋の一線の研究者達と比べ、莫大なハンディを負いながらの試みであることを考えてもらいたい。そんな貴重な仕事を体験された碩学達が、日本の読者のために『狐物語』を紹介するために執筆されたのがこの小著である。物語の誕生から、起源、発展に至るまで、具体的な話を数多く鏤めながら構成されている。狐ルナルと狼イザングランの争いが膨大な物語の核になっている。そこにはフランス中世の社会が生きて、時には忠実に、時には風刺的に逆説的に描かれているのが解る。『狐物語』は一般に、動物叙事詩と呼ばれるが、それがフランス中世文学の他のジャンル(武勲詩、宮廷騎士道物語、フェアリオなど)とどういつた点が異なっているかも明らかにされる。主人公ルナルの

結末はいかにも象徴的である。それまで物語の中で、二度も死にかける場面があるのだが、最後には全く健在にもかかわらず、国王(ノールという名の獅子)の使者の口から「ルナルは死んだ」と国王に伝えさせるのである。ルナルは「ルナルの死」の枝篇が書かれてもなお死んでいないのである。

(渡辺浩司)

### エッセイ・名大生の読書時間

昨春秋に生協で実施された、大学生生活実態調査で名大生の読書平均時間は、一日約30分であった。これを多いと見るか少ないと見るかは、読者各人によつて異なると思う。しかし数年前と比べると確実に減少傾向にあるようだ。

やはり、学生の活字離れというのは名大生にも当てはまるようだ。

生協書籍部の人の話によると、十年くらい前の共通一次が導入された頃から本の売れ行きが減ってきたそうだ。

我々、伝書編編集スタッフとしても、読書推進運動をする者としてこの傾向を打破しようとして努力している。

そう、伝書編は同人誌ではないのであるということでおわり。

(おたね)